

「その星を見て喜びにあふれた」

マタイによる福音書 2 : 1 - 12

森島 牧人 牧師

新年最初の主日礼拝の今日、示された聖書は、「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。」(マタイ 2 : 1 - 3) と始まっています。

一般的にはこれは、東方からはるばるやって来た三人の博士が馬小屋の御子を拝み、それぞれに宝物を献げて帰って行った話として知られています。しかし、聖書をよく読むと、この出来事は主イエスの誕生から一か月以上経ってからのことであると分かるのです。まず、「・・・(学者たちが) 出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」(同 2 : 9 - 11) とあるように、学者たちが入ったのは馬小屋ではなく「家」となっています。さらに、ルカ 2 : 22 - 24 に、ユダヤの習慣に従って清めの期間(レビ 12 : 1 - 4) を家で過ごしたマリアとヨセフが、子供を主に献げるためにエルサレムの神殿に行き鳩を献げ物としたとありますが、レビ 12 : 6 - 8 によれば、産婦が貧しくて小羊が買えない場合には鳩を献げるとありますので、夫婦は貧しくて小羊が買えなかったことが分かります。これらのことから、ヨセフ一家はベツレヘムの馬小屋ではないどこかに一か月以上留まっていて、そこへ学者たちがやって来たことが明らかとなります。

さて、今日の聖書には二種類の人々が登場します。最初はユダヤ王ヘロデとその周りの人々です。ローマ帝国の傀儡政権で、しかも正統のユダヤ教徒ではなかったヘロデは、それをカバーするために立派な神殿を建てますが、彼にとっての信仰は自分の政治的な野心を満たすための道具でしかありませんでした。そんな中にもたらされた「ユダヤ人の王」の情報は、救い主のことなど頭になかった彼やエルサレムの人々を不安に陥れます。聖書学者らから「指導者がベツレヘムに生まれる」との預言があると聞かされた彼は、占星術の学者たちを呼び、「見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう。」と言って三人を送り出しますが、それはその幼児を殺そうと企んでのことでした。

そんなヘロデと違って、もう片方は、メシアの誕生を心から待ち望んだ東方からの学者たちです。メシア登場の場面の中心に東方の人、つまり異邦人がいたことは、ユダヤ人にとっては大事件だったと思われませんが、私たち異邦人にとっては大きな恵みです。メシアの星を見て、時間、お金、命をかけて旅を続けた三人の学者の目的は一つ、メシアを拝むことでした。これはまさに神の御心に従い家族を連れて旅に出たアブラハムが、旅先々で祭壇を築いて神を礼拝したのと同じであり、これこそが信仰者としての第一の姿です。

真の信仰者としての第二の姿は、視線が主イエスからぶれず、礼拝が真剣であることです。彼らの長旅を支えたのは、主とお会いすることの喜びと救い主への愛でした。聖書は「家に入った彼らは、ひれ伏して幼子を拝み」と同義語を重ねて真剣さを強調しています。

信仰者として第三の姿は 11 節の後半「宝の箱を開けて」というところです。私たちが求められているのは、何を献げるかではなく、宝の箱を開けることにあります。主イエスは「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」(マタイ 6 : 21) と言われています。つまり、お金、家族、仕事、ポジションのことなどで一杯になっている、私たちの心こそが宝の箱なのです。学者たちは箱を開けて宝物を献げ、身軽になって帰って行きましたが、心を開けなかったヘロデは、国中の幼児を殺し、自分の妻や息子をも殺して、死んで行ったのです。

私たちも自分の宝の箱を開けない限り、心の奥にある重荷を負ったまま倒れることとなります。しかし、私たちが締め付けているこの重荷を私たちに代わって負うために神の御子が人として来られた、これがクリスマスです。自身の宝の箱を開けて、喜んで主イエスを受け入れることこそが、私たちの本当のクリスマスであり、喜びの時なのです。この一年も、主イエスの愛で私たちの宝の箱を一杯にして、進んで行きたいと思えます。

(説教要約 羽入田悦子)